

◆都心にも雪が降るといふ天気予報が出た。その日は朝から降ってきたので、急いでスーパーへ行って後は時々窓から積もる様子を見て静かにしていた。すると夕方、秋田の同級生から電話が来た。テレビを見てみると雪の影響で東京が混雑しているようだが大丈夫ですか、と心配してくれる。お互いの思いや近況のことなどを話しながらも、雪国では大変な思いをしていることはよくわかる。電話の声に、遠い日の雪の感触が懐かしく伝わってきた。

市川茂子

◆次年度自治会役員になることが決まっていた、これは輪番で、構成する二つの団地棟ごとに、予定表ができています。役員は、十年ぶりくらいになる。役決め会議というのに出て、前には、会計をしたことを云って、防災を希望してみたところ、希望する役ごとに、じゃんけん決めてもらう。じゃんけんは久しぶりで、二つの役で、じぶんは勝ちきれず、残ってしまった。残った三役（会長、副会長、事務局）をこれも残った三人で分け合うことになった。ことし七十歳になるような年齢の者は、じぶんのみ。残りも六十代だが、うちはきはきした言動の女性を会長に推し、土日は都合がつかないという一人を事務局に、平日も動けるじぶんが副会長になった。一年間、多く若い

人たちと知り合うことになる。逃げていてもはじまらない、と思うしかない。

小野澤繁雄

◆二月初旬にお祭燈の行事があった。小正月の行事なので、いつもは旧正月十五日前後にしているのだが、今年は三月二日が小正月にあたり、例年より遅いためか早めに行ったようである。俳句の世界では左義長と呼ぶお祭燈。宮中の遊び打毬だきゅうに使う毬杖きうちょうというラケットに由来するそうだ。子ども等の声が響き合う小正月の楽しみをいつまでも残してやりたいと思うひとときだった。神村ふじを

◆二〇一八年一月二十二日午後から二十三日の朝にかけての降雪は異常であった。雪国の方々からすれば何のことないかもしれないが、朝起きた時には塀の上で三十センチを超えていた。予報では知らされていたので、「お助け隊」という便利屋へ雪掻きの予約はしておいたものの、もうすでに「夜中しか行けません」と言う。高齢一家には手に負えないのでそれでもと依頼したが、昼過ぎに「雪の量が多すぎてもっと遅くなる」と連絡があった。老人三人の中で一番若い私が、スコップを持って、とりあえず玄関から門扉までのスロープと道路の車庫とごみ集積所までの歩行スペースを確保した。若い時には東と北側を義理の兄と掻き終えたが、もう駄目である。二月初めにも雪の予報が出ている。

河村郁子

◆暮に娘とつれあいのフアン君が帰ってきて、十日いた。なんでこんな寒い時、と思っていたら、スペイン南部で育った彼は雪を見たことがないので、わざわざ十二月にきたとのこと。まず仙台に墓まいりに三人して行った。出る時、山形は雪降りだったので娘が「仙台は雪ないけど、いいの」「いいよ」の会話をしたらしい。私は日帰りしたが、二人は仙台観光に残った。翌日は地吹雪みたいに雪が舞い上がる珍しい大雪。「君がああ言ったから、雪が追っかけてきた」と彼が笑ったらしい。やさしいこと。

河内愛子

◆秋には雨がよく降りましたので、その埋め合わせとして暖冬になればよいのと思っていましたが、寒波というありがたくないお土産を持って冬はやってきました。二十センチの雪を降らせました。いろいろな不都合なことを引き起しました。昭和二十五、六年頃は四十センチ位は当然のように降り、その頃関西より引越してきた私は、珍しくうれしかったのを懐かしく思い出しています。

谷垣満壽子

◆朝日俳壇選者の一人である我が師・金子兜太は、体調を崩ししばらく選者を休むと、一月十五日の新聞に載っていた。師は今年九月で白寿となる。その時点で主催の結社誌「海程」を廃刊にすると宣言した。その後は思う存分作句をして過ごしたいと語っている。体調が回復しお元気になるよ

う切に願っている。今回題にした「ふたりごころ」とは師の好きな言葉だ。「情」という字を使う。外に向かつて開いていく時の心の状態は「情」を書き、内に閉じる時の心の状態は「心」と書くという。私は自分だけわかればいいと思いがちだが、これからは「ふたりごころ」を大切にして句を作っていきたいと、意を新たにしたいところだ。

新野祐子

(金子兜太さんは二月二十日、九十八歳で死去した)

◆先日、東京で雪が積もった。二〇一四年以来四年振り、積雪量は二十三センチとのこと。東北など豪雪地帯の人々からみれば、こんなのは積雪のうちに入らないだろうけれど。その日は定期検診の日だったので朝から出掛けたが、救急車がかなりひんばんに通る。転倒・骨折の人が多いのだから。帰りにスーパーマーケットにパンを買いに寄ったら、パンをはじめいくつかの食品の棚がガラガラ。雪で交通機関が麻痺して品物が届かないとのこと。これにいちばん閉口した。松井淑子

◆去年からひきつづき天候が不順だ。ことしは東京でも、早速雪が降りはじめた。予報では一晩中降りつづくという。雪国のことを思えば比較にならないと思うが、私の頭は明日の雪かきをどうしよう、ということではいっぱいだ。とにかく年齢を考えても雪かきはもう無理なのだ。こんな季節になる前に、雪が降ったら助けてね、と若い人に冗談のように言っただけだが、実際にはお願いす

ることになってしまった。「明日、雪かきをお願いしたいのだけれど」「分りました。明日行きま
す」と言ってくれてホッとした。

丸山弘子

◆吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』の漫画版が売れている。私とハルも読破し、心を熱くし
た。—いいことはいいこととし、悪いことは悪いこととし—、という言葉に勇気をもらった。私
の人生は何年かに一度、地鳴りのような音を立てながら変化する。今、また、変化が訪れている。

山内裕子

